

<日本レジャー・レクリエーション学会第39回学会大会 地域研究 於：江戸川大学>

## 「旧葛飾郡エリアのレジャー・レクリエーション資源」報告

田中伸彦<sup>1,2</sup>

### Report on regional study 'Leisure and recreational resources in former Katsusika County Area'

Nobuhiko Tanaka<sup>1,2</sup>

#### 1. 「旧葛飾郡」について

##### (1) はじめに

今回の地域研究は「旧葛飾郡」で行うらしい...  
ところで、「旧葛飾郡」とは、果たして何なの  
だろうか？

神奈川県で生まれ育ち、現在は茨城県つくば市  
に居住している根っからの関東人である筆者でさ  
え、「旧葛飾郡」とは何なのか、どこからどこま  
でが「旧葛飾郡」なのか、さらに言うと、「旧葛  
飾郡」がどのような地域イメージを持つのかなど  
について、皆目見当がつかなかった。

終わってみれば、主催者の意図するところや、  
学会のテーマに「旧葛飾郡」を採りあげる意義が  
よく分かったのだが、地域研究に参加しなかつた  
多くの会員に対して本報告を行うには、まず「旧  
葛飾郡がどのようなところか？」ということから、  
説明する必要があるだろう。

##### (2) 「旧葛飾郡」って何？

「葛飾」といえば、「東京都葛飾区」や、映画  
寅さんシリーズで有名な「葛飾柴又の帝釈天」、  
そして根強い人気を持つ漫画「こちら葛飾区亀有  
公園前派出所」などが真っ先に浮かんでくる。い  
ずれも東京の下町を連想させるものである。

しかし、今回の学会大会の開催地は千葉県流山  
市にある江戸川大学である。東京都下ではない。  
「葛飾」と「流山市」との間にはいかなる関係が  
あるのか？その点が私には今ひとつぴんときな

った。

そこで、インターネットのフリー百科事典「ウ  
ィキペディア」で「葛飾郡」を検索してみた。す  
ると、「葛飾郡」は、事典の一項目としてちゃんと  
掲載されていた。そして、その歴史や地理的範  
囲などの説明が、事細かに載っていた<sup>1)</sup>。

「ウィキペディア」によると、「葛飾郡（かつ  
しかぐん、かつしかのこおり）」はかつて下総  
国・武蔵国に存在した郡のことなのだそうであ  
る。かつての地名なので、今は「旧葛飾郡」と  
「旧」をつけて呼ぶことが多い様である。現在の  
地名でいえば、東京都・千葉県・埼玉県・茨城県  
に分断されてしまった南北に細長い地域を指すこ  
とになる。

よりイメージしやすく言えば、江戸川の周辺地  
域に相当する。茨城県の関宿で利根川と袂を分け  
る江戸川が、野田、流山、松戸、行徳と下ってい  
き、東京湾に注ぐまでの約60kmの川筋が、か  
つて「葛飾郡」と呼ばれていたとのことである。

##### (3) 「旧葛飾郡」のキーワードは「水」と「河川」

ところで、この「旧葛飾郡」を、東西方向に切  
って断面図をつくってみると、普段食卓でよく使  
うような平皿のような地形をしていることが分か  
る。

流域の東を流れる江戸川と、西を流れる見沼代  
用水が標高的に一段高くなっており、いわばお皿  
の縁になっている。その間に挟まれた地域は平皿  
の底よろしく平たく窪んでいるのである。そし

1 独立行政法人森林総合研究所 Forestry and Forest Products Research Institute

2 東海大学観光学部 School of Tourism, Tokai University

て、そのお皿の底には、東から中川、倉松川、大落古利根川、元荒川、綾瀬川と実の5本の河川が走っている。

この平皿型の地形こそが、今回の地域研究で「旧葛飾郡」と採り上げる秘密が隠されている。関東平野は、どこも文字通り平たく、似たような標高と思われがちであるが、その中で一段低い場所にある「旧葛飾郡」の人々は、良い意味でも悪い意味でも常に水と関わり続ける宿命を、自身のライフスタイルの中に組み込まれているわけである。

要するに、旧葛飾郡の人々は、江戸時代から現在に至るまで、洪水から身を守るため、水運を行うため、田畑に水を引くため、そしてくつろぐために、遊水池や放水路をつくり、運河を掘り、用水を引き、水辺に宿屋や茶屋をつくった。「旧葛飾郡」の人々の文化は水とともに育まれていったのである。

## 2. 「地域研究」の報告

### (1) 集合地 - JR 金町駅 -

ひととおり「旧葛飾郡」の説明が終わったので、本題である「地域研究」の報告に移りたいと思う。

「地域研究」の当日、つまり11月27日の午後12時半に、集合場所の常磐線金町駅に集まった参加者は、総勢15名であった。

土屋薫大会実行委員長（江戸川大学）の挨拶（写真1）のあと、小型バスで、東京都・千葉



写真1 土屋薫大会実行委員長の挨拶

県・埼玉県の3都県をまたにかけての移動が開始された。

今回訪れた巡検地は、東京都立水元公園（東京都葛飾区）、利根運河（千葉県流山市・野田市）、そして首都圏外郭放水路（埼玉県春日部市）の3カ所である。

### (2) 巡検地（その1）：東京都立水元公園

はじめに訪れたのは、東京都立水元公園（東京都葛飾区）である。

水元公園とは、1965（昭和40）年に開園された面積約88haの都市公園である。小合溜（こあいだめ：写真2）という遊水池を中心とした都内で唯一水郷の景観をもつ公園で、都市化が進む1975（昭和50）年までは、このあたりは都立江戸川水郷自然公園に指定されていた。また、小合溜の対岸は埼玉県三郷市で、埼玉県立みさと公園となっている。



写真2 水元公園 小合溜で釣りを楽しむ子どもたち

ちなみに、小合溜とは、1729（享保14）年、将軍徳川吉宗の時代に、江戸幕府が灌漑用水を調整するために開削した遊水池のことである。かつては旧古利根川の一部だったが、古利根川が増水にさいなまれた際、当時の治水家 井澤弥惣兵衛が、江戸の町を洪水から守るために小合溜として遊水池化したのである。平時はこの水が葛飾や江戸川地域の水田を潤す灌漑用水となった。つまり灌漑用水の水源になったことから、ここが「水元」と呼ばれるようになったわけである。

巡検では、はじめに広々とした園内を散策しながら公園の歴史や地勢、自然、住民の利用実態などについて話を伺った。水辺と中心とした園内には、ポプラ並木やメタセコイアの森、ハンノキな

ど水辺に強い樹木が生育している。今回の巡検では見ることができなかったが、ハナショウブ、スイレン、コウホネといった水生植物の花を楽しむ人も多いとのことである。また、暖かい季節には水面を利用したボート漕ぎなども盛んで、季節を問わず週末を中心に余暇を楽しむ訪問客で賑わっている。ゆったりとした空間を歩きながら、水元公園に関する解説をオンサイトで受けることができた（写真3）。

その後、「水元公園サービスセンター」の会議



写真3 水元公園 園内を歩きながらも議論に花が咲く

室で、水元公園と東京の緑地計画の歴史についてパワーポイントを用いたレクチャーを受けた（写真4）。このレクチャーは、江戸川大学で行われた学会大会の間、パネル展示コーナーでリピート上映されていたので、ご覧になった方も多いのではないかと思う。



写真4 水元公園 サービスセンターにおけるレクチャー風景

レクチャーでは、関東大震災後の震災復興計画、そして第二次世界大戦後の戦災復興計画の話が印象的であった。2つの復興計画では、それぞれ東京をぐるっと囲むようにした緑地、つまりはグリーンベルトの構想が持ち上がったが、2度とも構想が完成することなく終わった。実は水元公園はそのグリーンベルトの一角に当たる公園である。もしグリーンベルトが完成していたら東京はもっと緑豊かな潤いのある町になっていたであろうことを、古地図や写真などやふんだんに用いて感銘深くパワーポイントで説明して頂いた。

### （3）巡検地（その2）：利根運河

続いて訪れたのは、利根川と江戸川を結ぶ近代土木遺産の利根運河（千葉県流山市・野田市）である。

利根運河とは千葉県の柏市舟戸から流山市深井新田の間のおよそ8.5 kmを開削し、利根川と江戸川を結んだ人工の河道である。1890（明治23）年に東北からの物資を船で東京に運ぶため、民間資本を導入してつくられたもので、最盛期には高瀬舟や外輪蒸気船が1日100艘ほど運航していたそうである。

水運業の発展に伴い、戦前、運河の周りには活気ある水郷文化が育まれた。しかしその後の鉄道、自動車の普及に伴い、利根運河は水運の要としての役目を終えた。現在は、静かで潤いのある水辺風景や安らぎの空間を活用し、地域のエコミュージアムとして新たな活用が行われている。

巡検では、国土交通省江戸川河川事務所運河出張所の中に併設されている「利根運河交流館（写真5）」で、地図を用いて地勢や歴史、自然など



写真5 利根運河交流館で地勢と歴史の解説を受ける



写真6 利根運河 岸辺を歩きながら解説を受ける

の解説を受けた。また、実際に運河の岸辺を散策しながら利根運河の自然や文化の豊かさを、解説つきで満喫することができた(写真6)。現在は水量が少なく、往来する船はほとんどないのだが、かつては商業船の往来で活気づき、またボート部の遠漕で学生が行き来していた情景が目に見えようであった。

また、この運河を開削するに当たって工事の計画・監督に当たったオランダ人土木技師ムルデル氏とデ・レーケ氏の話も興味深かった(写真7)。1885(明治18)年にムルデルが「利根川運河計画書」を内務省土木局に提出してから実際の工事に取りかかるまでに、実に3年にわたる根気のいる交渉が必要だったこと、1日3,000人、延べ200～220万人をかけた大工事だったことなどを伺い、現在の緑と潤いにあふれる運河は、先人の多大なる人手をかけてつくられた



写真7 利根運河開削に尽力したオランダ人技師ムルデルの顕彰碑

環境であったことを知り、改めて感銘を受けた。

#### (4) 巡検地(その3): 首都圏外郭放水路

最後に訪れたのは、世界最大級の地下放水路である首都圏外郭放水路(埼玉県春日部市)である。

首都圏外郭放水路とは、2006(平成18)年に完成したばかりの、地下50mを貫く世界最大級の地下放水路である。上述のとおり、「旧葛飾郡」は平皿の底のような形をした低平地である。昭和30年代頃からの急激な都市化の進行に伴い、この地域は大きな台風や集中豪雨のたびに慢性的な洪水に見舞われるようになった。つまり、「旧葛飾郡」の住民を洪水から守るという長年の悲願を実現すべく完成したのが首都圏外郭放水路なのである。従って、この放水路は暮らしの安全・安心を守ることに第一の役割である。が、それだけに留まらず、水と人との共生を考える環境教育や防災教育の場として利用されたり、地上・地下の広いオープンスペースを利用してスポーツやコンサートなどにも活用されている。

巡検では、はじめに付設の地底探検ミュージアム「龍Q館」で、住民の安全・安心な生活を支える治水の重要性や放水路のしくみについて解説を受けた(写真8)。近代の最新掘削技術を駆使してつくった立坑にはスペースシャトル1台がすっぽり収まることや、排水システムには航空機用仕様の14,000馬力のガスタービンエンジンを改造して利用していることなどの話を伺い、我々のごく普通の日常的な余暇時間は、この様な最新技



写真8 龍Q館における解説風景

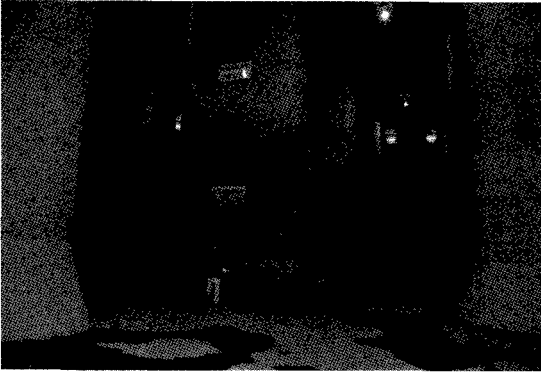


写真9 地下50mにあるパルテノン神殿  
さながらの調圧水槽

術に支えられて営まれていることを再認識した。

その後、100段余りの階段を降り、地下50mの放水路（調圧水槽）の中に実際に入って見学するという貴重な機会に恵まれた（写真9）。あたかもギリシャのパルテノン神殿のように太い柱が立ち並ぶ巨大水槽は、豪雨時に水をためる機能はもとより、平時にはコンサートなどのイベント空間として利用されることもあるそうである。

### 3. おわりに

半日という短時間ではあったが、今回の地域研究を通じて、我々の生活を支え、潤いを与え、文化をはぐくむ「水」や「河川」についての様々な見聞を深めると同時に、レジャー研究において「水との関わり」を考える大切な機会を得ることができた。

巡検で移動する中、私は、ディズニー・インスティテュートによる、ある著作の一片を思い出していた<sup>2)</sup>。ディズニー・ワールドにおける4つのサービス基準である。要するに、最高のレジャー空間を、人為を借りて作り出すために必要な4つの要素のことである。

4つの要素とは「安全」、「ゲストへの配慮」、「ショー」、「効率」であり、この順番でディズニーで働くキャストの行動の優先順位が定まるわけ

である。今回の巡検の場合には「ゲスト」を「住民や来訪者」に、「ショー」を「地域らしさ」と書き換えた方がしっくり来るかもしれない。

より具体的に言えば、「①自分自身や愛する人たちの身の安全が脅かされないこと」、「②『住民や来訪者』の感情や才能や文化を認め、尊重すること」、「③最上の水準で『地域らしさ』を提供すること」、「④地域を効率よく活用すること」という4つの順番で地域を管理する必要があるとすることである。

近年は、観光立国が提唱され、豊かなレジャー空間へのニーズが高まっている。一般的に地域づくりの中で、上記①が最優先されていることは疑いのない事実であろうが、我が国で次に優先されるのは②や③ではなく、④となっていることが、豊かなレジャー空間づくりの足かせになっているのではないかと思う。

現在は政治やマスコミなど「効率」一辺倒の論調が目立つが、②や③を飛び越した形で④を優先すると、住民も来訪者のお互いがお互いを尊重することがないまま、つまり、その地域が持つ「国の光を観る／観せる」ことができないまま、「地域らしさ」が衰退し、レジャーという点からは素っ気ない空間になっていくのではないかと考えさせられた。

そのような中で、「旧葛飾郡」の人たちが水や河川との関わりの中で、安全→住民・来訪者への配慮→地域らしさの提供→効率、の順番でまちづくりに取り組んでいる姿勢を拝見させて頂き、非常に感銘を受けた次第である。

### 引用文献

- 1) <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%91%9B%E9%A3%BE%E9%83%A1>
- 2) ディズニー・インスティテュート著・月沢李歌子訳、ディズニーが教えるお客様を感動させる最高の方法、日本経済新聞出版社：210pp、2005